

東京55仏教会便り

# 東京お寺めぐり通信

no.04  
2019 Spring

[東京お寺めぐり通信] 2019年5月30日発行

制作 有限会社ケーアンドケー

〒336-0022 埼玉県さいたま市南区白幡3-1-9 1-715

TEL.048-838-7360 FAX.048-711-5175 http://kaeru-kan.com

Copyright ©2017 Kerori&Vikki Takayama All rights reserved

一蛙さんとめぐる東京・第4回

## 西新井大師を参拝した、 明治生まれの カエルグッズコレクター 小澤一蛙翁とその肖像

昭和24年7月10日曜日の10時半、西新井大師堂前に小澤一蛙さんの姿がありました。11時から始まる、武蔵野史蹟会・日本郷土会の第91回例会の座談会に参加するためです。

一蛙さんは、この「東京お寺めぐり通信」の第一回のトップ面ですで紹介しているように、「我楽他宗」という趣味の集団に属していたことで、東京を中心に会員それぞれの家を訪ねて、蒐集品の交換会などをしていました。それは大正から昭和にかけての頃。

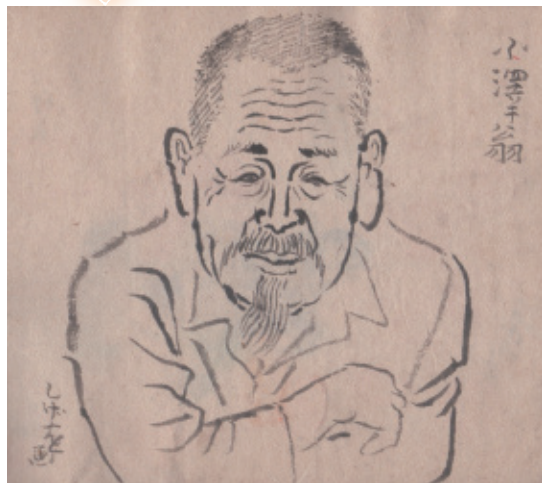
戦後四年を経た昭和24年の一蛙さんは、73歳になっていました。以前から一番に挙げる趣味は「蛙二関スルモノ」でしたが、他にも「神仏二関スルモノ」「彫刻二関スルモノ」「郷土玩具二関スルモノ」にも興味をもち、同好の会に入り、遠足や旅行を楽しんでいました。

そんな、趣味を生きがいとする生活のなかで集まったお札やハガキ、チケットなどをスクラップした趣味帳「蛙のお宿」(第七號昭和二十一年神無月より)には、その日、西新井大師堂を参拝したと記されていました。

大師堂では、まだ若い和尚による大師についての講話を聞き、昼食後、本堂で和尚が護摩を焚くなか読経、木魚に合わせて御詠歌を唄ったことなどが書かれています。また、堂内では、犬、兎、牛、龍が描かれた絵馬や、左甚五郎の作とされる龍や鳳凰の木彫も拝観したことを記録。その日は午後2時過ぎに散会し、大師堂を出ています。

この趣味帳「蛙のお宿」には、左図のような一蛙さんの似顔絵も見られます。これを描いた画家宮尾しげを(1902-1982)は、故岡本太郎画伯の父で漫画家だった岡本一平に師事して漫画家になり、江戸風俗研究家としても知られた人です。生涯で漫画作品、江戸風俗に関する著作をたくさん遺していますが、「小澤一蛙翁」の肖像を数点描いていて、とても親しみを感じていたことが伝わります。

カエル文化研究家 高山ビッキ



明治・大正・昭和を生きた東京人

●小澤一蛙 Gallery●

### 第4回 足立区仏教会

#### CONTENTS

歴史の折々に足立を行きかった人々とともに

#### 1 1500年前この地に姿を現した人々と足立の成り立ち

足立の誕生と千住の起源／中世までの足立と地名の由来  
近世の足立とここを通過した人々／幕末・明治、そして現代へ

#### 2 足立区仏教会の主な行事

托鉢／花まつり

#### 3 通称の由来や行事が楽しめるお寺

「いにしえ」を歩く／古くからの信仰や古建築／文化・芸能に親しめるお寺

中国料理  
東天紅

香りある豊かな暮らし  
香老舗 松榮堂

喜多蔵の里



第4回

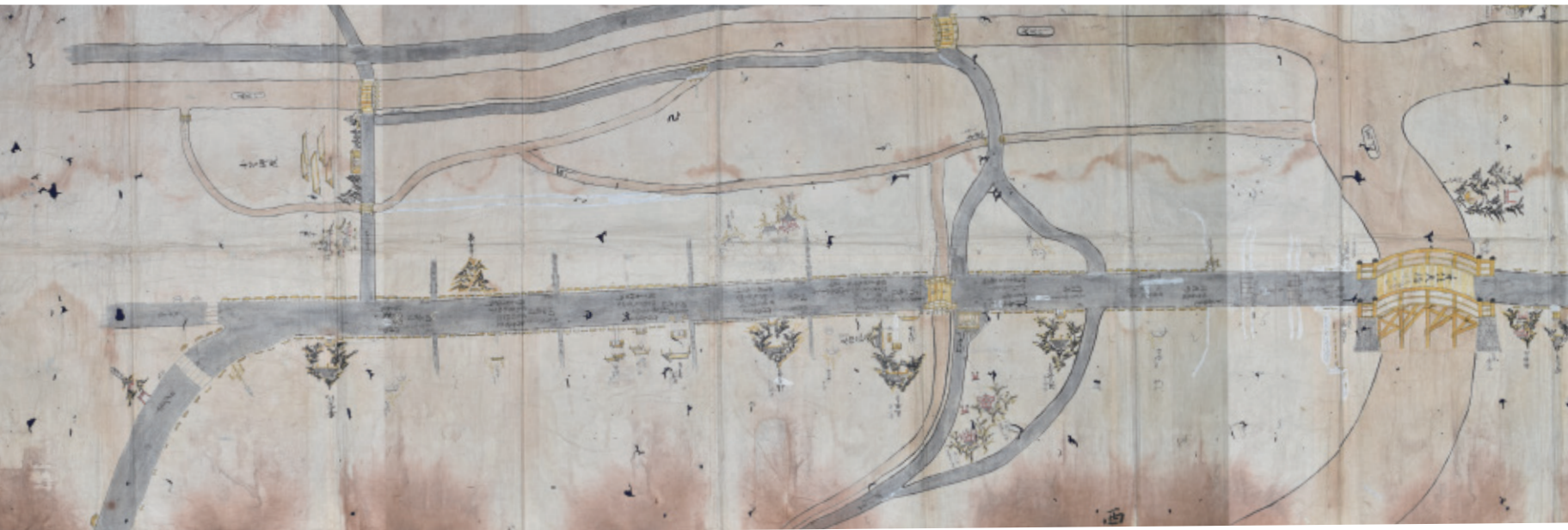
# 足立区仏教会

歴史の折々に足立を行き  
かった人々とともに

足立区にある千住という地名は、学校の教科書の中で江戸時代に『おくのほそ道』を著した俳聖松尾芭蕉（1644・1694）がここから奥州・北陸に向かったと習い、東北方面への玄関口のイメージを抱いている方も多いのではないのでしょうか。

実際、この地の歴史に少しふれてみると、太古の昔から現在までここに姿を現し、行きかった人々によつて不思議な磁場が生まれているように感じられます。まさに、芭蕉の言葉「月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり」です。

その歴史の流れのなかで信仰が生まれ、遙かな時を超えて現在の足立区仏教会につながっているといえます。今回の東京お寺めぐり通信では、足立区の成り立ちの歴史を追い、その折々にドラマを演じるように生きた人々や舞台として記録されている寺院を紹介しましょう。

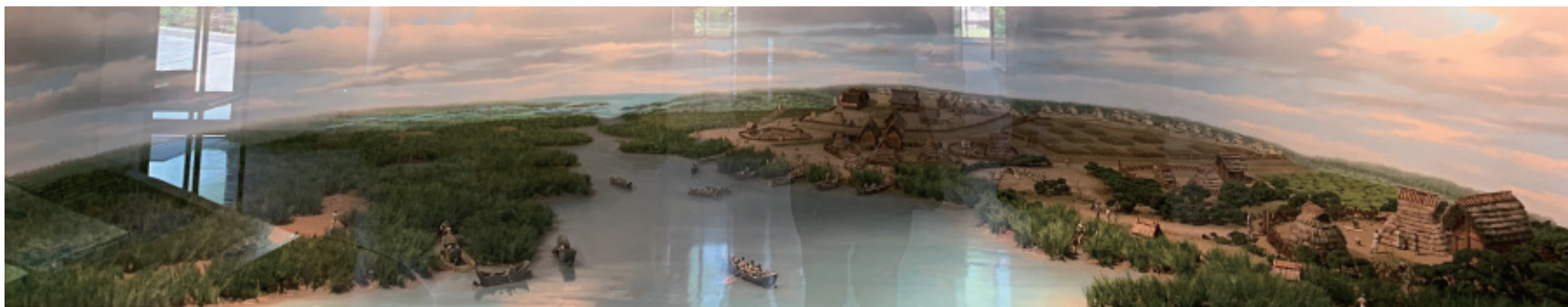


江戸時代の千住宿の絵図／「千住宿図」高田家文書（足立区郷土博物館蔵）

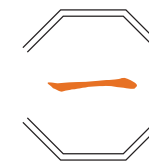


現在の千住の賑わい。通り名の「宿場町通り」が見える。





伊興遺跡公園展示館のジオラマ。太古の昔、生活の場になっていた湿地帯。



# 1500年前この地に姿を現した 人々と足立の成り立ち

## 足立の誕生と 千住の起源

遠い昔、関東地方の大部分は海の中に沈んでいました。海が現在の海岸線近くまで後退したのは、縄文時代の終わり頃といわれています。足立区全域の土地が姿を現したのも縄文晩期。現在、同仏教会には中川、大谷田の地名に6ヶ寺所在していますが、中川沿いのこの辺りは葦や真菰が生い茂る湿地帯でした。また、花畑、南花畑には7ヶ寺があり、毛長川沿岸のこの地域は早くから人々の生活の場になっていました。

4～5世紀は、この地の信仰の黎明期といえます。古墳文化が関東地方にもたらされ、この辺りにも村落の首長の墳墓が築かれます。現在、5ヶ寺ある入谷には入谷古墳（入谷氷川神社）があり、大谷田、花畑、そして伊興本町、東伊興を含む伊興の地名で18ヶ寺ある伊興でも古墳が確認されています（P18参照）。そこで死者への鎮魂の儀式や村落共同体の豊穰と繁栄を祈る祭祀が行われたことは十分に想像できるでしょう（下図写真参照）。

その後、6世紀半ばに百済から伝来した仏教は、関東地方にも広がります。地方豪族たちは氏寺を建立するようになります。足立の地の有力な氏族として武蔵国国造の丈部直

不破麻呂（武蔵国足立郡外従五位下丈部直不破麻呂）が『続日本紀』に名を残しています。

足立区において長く要衝の地となる千住は、延喜年間（901～923）には武蔵国足立郡千寿村が開拓されたことで「せんじゅ」の名が起りました。



弥生時代から古墳時代につくられた方形周溝墓。



祭祀では巫女が水運の安全を祈願している。



## 中世までの足立と地名の由来

平安時代後期には、陸奥国（東北地方）で前九年の役が起こり、安倍氏討伐に向かう源頼義・義家親子が足立を通ります。ここにいくつかの伝説が語り継がれます。たとえば、現在も六月という地名に立地する炎天寺の由来。六月の炎天下、野武士の激しい抵抗にあり、苦戦を強いられた義家が八幡宮に戦勝を祈念。すると、奇跡的にも太陽が背後にまわり、敵の眼をくらまし大勝したと伝わっています。六月八幡神社はこのときの勧請によるものと。

また、花畑に大鷲神社があります。が、やはりこの戦いのときに参戦した武將新羅三郎義光の伝説に由来します。義光が援軍を率いて奥州に向かう途中、足立の花俣郷、つまり花畑の地に至り綾瀬川の水で身を浄め仏神に戦勝を祈願。すると一羽の鷲が天に舞い上がり、その甲冑が光を放ちました。まさに吉兆。義光は康平5年（1063）、安倍貞任・宗任を滅ぼして京都に帰還できました。花畑には村人によって鷲を祀った社、大鷲神社が建てられました。12世紀以降の関東は、源家の流れを汲む武士が勢力を広げるなか、注目に値する人物に足立郡の郡司だった足立右馬允遠元（あだちうめのじょうとおもと）がいます。人格的な評価も高く、平治元年の平治の乱の顛末を描いた『平治物語』にもその友情に篤い人柄が描かれています。足立氏は源頼朝の時代からその後の北条執権体制になってもゆるぎのない立場を保っていました。

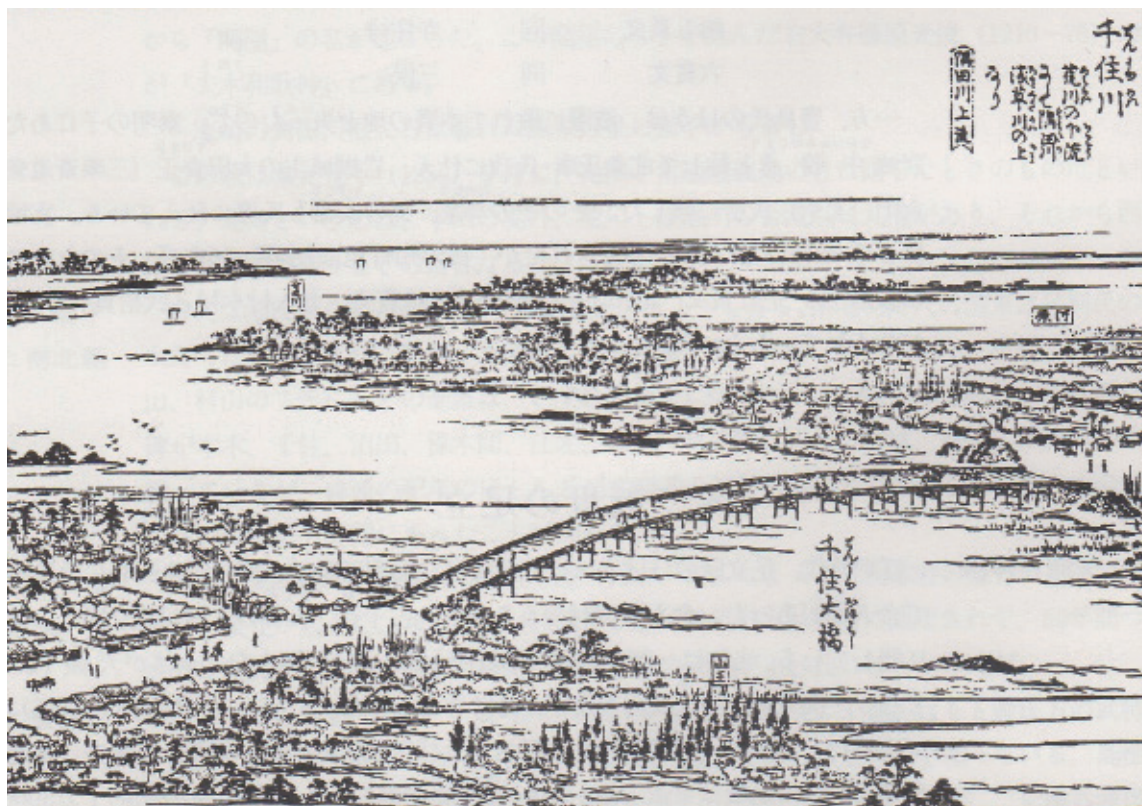
この時代とかかわる寺院に、梅田地名で立地する4ヶ寺のなかの明王院があります。頼朝の叔父にあたる源義広が足立郡淵江村榎戸に寓居（仮住まい）し開山したことが伝わる。『新編武蔵風土記稿』には、その子孫が淵江村を梅田村に改めたと書かれています。

その後、足利氏の勢力が強まった南北朝時代から関東の領土の実権が上杉氏に移った頃、足立の地で勢力をふるった武將の一人が千葉氏。足立区島根地名の2ヶ寺のうちの國土安穩寺は、時の領主千葉太郎満胤（1427年没）の建立、と寺の縁起が伝えています。

## 近世の足立とここを通過した人々

中世から奥州街道の要路として賑わった千住の町は、江戸開府後益々開けていきます。千住を中心に足立に足跡を残した人々、そしてこの頃の歴史にかかわる千住の寺院を紹介しましょう。

千住大橋の架橋がこの地の開発にはずみをつけました。千住は町並みが形成され、慶長2年（1597）には、人馬継立村（宿駅で人馬を替えて、貨客を送り継ぐこと）に指定されました。千住大橋の工事にたずさわった人物に、千葉氏一族で、新



千住大橋の名所図絵（足立区仏教会その歩みと名鑑より）





日光道中が整備されるとここに徳川家の御殿が造営され、徳川秀忠、家光、家綱らが利用した。通称赤門寺。



巢兆寺として知られる慈眼寺。

田の開発に尽力した石出掃部亮吉胤<sup>いしかのすけよし</sup>がいます。その新田開発から幕府の御用市場のひとつになった「やっちゃば河原町」の名が生まれました。千住仲町にある源長寺は、吉胤が郡代伊那備前守忠次を勧請開基とし、圓誓不残を開山に迎えて慶長15年（1610）に創建したと伝わります。

そして、元和2年（1616）に徳川家康が没すると、江戸時代における千住はさらなる発展を見せます。その遺骨が翌年日光に改葬されたことで、將軍や諸大名が日光へ参詣する機会が増えます。その結果、千住の交通量が格段に増えて、宿場町として整備されていきます。

寛永2年（1625）には、千住が日光道中の初宿に定められ、寛永12年（1635）に参勤交代が制度化されると、奥州、日光、水戸街道の諸大名はすべて千住宿を通過する

ことに。千住宿は、板橋、内藤新宿、品川と並んで江戸四宿のひとつに数えられます。（P2の絵図参照）

千住の勝専寺は、文応元年（1260）草創の古刹ですが、慶安2年（1649）に荒川の洪水で千住大橋が流失したときに、四代將軍家綱が日光社参の帰途、二泊したことが記録されています。

千住の名を後世まで広く知らしめた江戸文化の担い手の代表といえは松尾芭蕉。元禄2年（1689）3月、船で深川を出発した芭蕉は「千じゅと云所にて船をあがり」と「おくのほそ道」に記しているように、千住橋戸河岸の船着場に到着し、そこから奥州へと旅立ちました。

また、千住にあつて文化文政（1804・1829）の江戸文化の発展に貢献した人に俳人で書画にも秀でた建部巢兆<sup>たけべ そめう</sup>（1760・1814）がいます。千住の慈眼寺

は巢兆と交流があったことで、通称「巢兆寺」と呼ばれました。巢兆は友人知己の多い文人で、儒者の亀田鵬斎<sup>かめだ ほうさい</sup>はしばしば千住の関屋の里に隠栖していた巢兆の元を訪ねています。

また巢兆自身は、荒川と綾瀬川の合流点にある丸池跡に居住していた谷文晁と往来がありました。文晁の住む丸池から西の関屋の里に至る辺りは庵崎<sup>いんさき</sup>と呼ばれ、江戸時代は隅田川八景のひとつに。巢兆はその辺りの片葉の葦を吟じた句「野分にも関屋のよしの片葉哉」を残しています。

足立にやって来て句をつくった人といえば、よく知られるのが小林一茶（1736・1827）。『武蔵国竹の塚といふに、蛙だたかい（蛙戦）ありけるに見にまかる』と詞書がつけられた一茶の『七番日記』の句「やせ蛙まけるな一茶是にあり」はあま



炎天寺「一茶まつり」の蛙相撲

幕末になると、足立、特に千住界隈はその動乱のなかで幕府軍と新政府軍が行きかい、ここに暮らす人々

## 幕末・明治、 そして現代へ

江戸時代、足立にはさまざまな人が惹き付けられ、過ぎ行くなかで他にはない文化的な土壌を育んでいったといえるかもしれません。足立は文化芸能以外に和算も盛んなところでした。また、宝永年間（1704 - 1710）にはすでに東京で一番古い寺子屋があったといわれています。

「蛙鳴くや六月村の炎天寺 一茶」江戸郊外の六月村炎天寺周辺の村落は、文人墨客を招き寄せる魅力があったのでしょうか。足立が「蛙多地」から来ているという説もうなづけます。現在、炎天寺では一茶ゆかりの寺として毎年11月23日に俳句コンテストや蛙相撲を行う一茶まつりを開催しています。

りにも有名です。足立は江戸幕府にとって新田開発の地としても重要でした。土木治水事業で南足立の低湿地の悪条件を克服した伊那氏によって、竹の塚堀を含む各方面の灌漑が進みます。その灌漑用水は終戦前まで穀倉地帯足立を支えました。

は不安な日々を送りました。

慶応4年（1868）の3月には、甲州勝沼で敗れた近藤勇以下新撰組約150人が、五兵衛新田（綾瀬二丁目）の金子左内家に滞在。そのことが伝わってやってきた追手の新政府軍は約3千人。しかし、到着したときに新撰組はすでに千葉県流山へと立ち去った後でした。

同年、江戸城が新政府軍の手に渡った4月11日の早朝、千住大橋の上には將軍徳川慶喜の姿がありました。ここから江戸に別れを告げ、水戸へと去って行きました。

その後もこの地において新政府軍は、旧幕府軍が落ちのびるのを阻止するために千住大橋の橋板を取り除き、奥州諸藩追討に向かうなど、動乱の余波は続きました。

そして、時代は明治へ。ここからの足立の発展は鉄道の開設と併行するように進みます。本稿もスピードアップしましょう。

明治5年、駅通制度が発足し、浅草・千住間、千住・宇都宮間に乗合馬車が運行。明治23年には千住馬車鉄道会社が設立され、千住・栗橋間が馬車鉄道となり、東武鉄道開設まで続く。明治29年には日本鉄道土浦線（39年には国有鉄道常磐線に）が開通し、北千住駅が設けられました。東武鉄道は北千住から明治32年に久喜まで、35年に業平橋まで、43年に伊勢崎まで開通しました。

大正時代の足立は、市街地は千住町のみで、大半は農村地帯でした。大きな変化は関東大震災がもたらしました。

足立自体の被害は少なかったもの



法受寺のムカエル

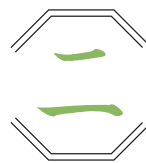
一茶も惹かれた「蛙多地」。  
今はカエル柄のタイルが見られる。

の、家を失った人のみならず、会社、工場、そして寺院も引越してきました。

昭和7年、東京市は市域を拡張し、足立区が誕生しました。それでも戦後までは田園地帯ののどかさを感じられた足立区。大きく変化していったのは、昭和30年以降。公営住宅の建設ラッシュがあり、区内全域が市街地域へと変貌していきます。

足立区の都市化の進展と交通網の整備が相俟って、昭和40年頃からの地下鉄の開通と、相互乗り入れ、都電廃止後昭和43年に完成した環状7号線に始まる道路網の整備は、今世紀になって現れた東京スカイツリーに連なる交通網の整備まで続き、芭蕉の言葉どおりこれからは旅人のように時が行きかうことでしょう。





## 足立区仏教会の主な行事には、 12月の托鉢と4月の花まつりがあります

歴史の折々にその名が聞かれた寺院については、すでにふれていますが、ここからは足立区仏教会の108ヶ寺が合同で行っている行事を紹介しましょう。

足立区は東京23区の中で、面積は世田谷区に次いで第2位の広さを有します。人口は昭和21年に約20万人でしたが、21世紀、平成30年現在68万人余り。その地域にあつて仏教会はどんな活動をしてきたのでしょうか。

### 【托鉢】

足立区仏教会は足立区が誕生した昭和7年にスタートしました。きっかけはその前年の満州事変（1923年）の戦死者の慰霊法要でした。それ以前には、大正12年（1923）の関東大震災のとき、この地域の若手の僧侶たちが中心になつて焼け出された人たちにのし餅を配りました。

こうしたことが仏教会にとって大事な社会的活動の托鉢につながります。当初から托鉢は西新井大師の本堂下で12月21日の縁日、納めの大師の日に合わせて行われていますが、一時期は北千住駅前でも募金をしました。集まったお金は地元のために使われるように、足立区社会福祉協議会に寄付しています。年によって、国内、国外を問わず義援金を届



弘法大師ゆかりの西新井大師總持寺では足立区仏教会の托鉢や花まつりが行われる。

けることもあります。

西新井大師は、東武伊勢崎線から乗り換えて東武鉄道大師線で大師駅につながら今も参拝客をたくさん迎えています。正式には五智山遍照院總持寺という、真言宗豊山派の寺院です。大師様、つまり弘法大師と深いつながりのあるお寺で、大師様が関東巡錫（僧が各地を巡り歩いて教えを広めること）のときに、この地に立ち寄ったと伝えられています。その当時この辺りでは疫病が流行っていました。大師様は同寺の本尊となる十一面観音像とご自身の像をお彫りになり、ご自身の像は枯れ井戸に安置して二十一日間の護摩祈願を行いました。すると、清らかな水が湧き、疫病に苦しむ村人たちはたちどころに平癒したという言い伝えがあります。

その井戸がお堂の西側にあったことから、地名が「西新井」に。境内には季節ごとに美しい花々が見られ散策を楽しむことができます。

### 【花まつり】

足立区仏教会のもう一つの大きな行事が、4月初旬に執り行われている花まつりです。

本サイト「東京お寺めぐり通信」の第一回では、寛永寺で開催される下谷仏教会の花まつりを紹介していますが、花まつりは4月8日のお釈迦様の誕生日をお祝いし、その根本精神である生命の大切さを伝えるために行われます。

足立区仏教会の場合、昭和43年の4月4日が第一回の花まつりでした。稚児行列とあま茶法要の後、清興と呼ばれる余興が催されました。同仏教会理事長の大野和之氏のお話では、宗派が異なる寺院の集まりである仏教会のイベントということでは



昭和44年の4月17日に文化会館で行われた足立区仏教会の第4回花まつりのつどい。



長く足立区の産業振興会館で行われることが多かったそうです。「毎年この清興にどんな芸能人や文化人がやってくるのか楽しみにしている人も。記録を見ると、初期の頃は、講演に作家の今東光さんや寺内大吉さん、評論家の藤原弘達さんなどを招聘。清興はマヒナスターズ、早野凡平さんなど昭和の芸能人の名前が見られます」と。

平成29年の4月4日には、第50回

の花まつりが西新井大師で開催され、本サイトでも取材しました。晴天に恵まれて、参加した18名のお稚児さんたちが境内を書院から光明殿まで歩き、あま茶法要のお加持を受けます。一人ひとりお釈迦様にお花を手向けあま茶をかける。このときの幼いお子さんの当惑と神妙さの入り混じった表情はいつ見ても愛らしいものです。

その後は光明殿内で一般参加者の



西新井大師の書院から光明殿まで練り歩く足立区仏教会の僧侶と稚児行列。



光明殿の前で僧侶の読経とともにあま茶法要のお加持を受けるお稚児さんたち。





光明殿内に響きわたる読経。



読経の後行われる一般の灌仏会。



お釈迦様にあま茶をそそぐ灌仏会。



花まつりの一日にお釈迦様が説きたいのちの大切さを感じて散会。



第50回の花まつりの清興の様子。

灌仏があり、足立区仏教会の僧侶による読経を聞くことができます。日頃、お経にふれる時間がなければ、この美しい季節に花まつりに参加してはいかがでしょうか。

清興は、伊藤夢葉師匠のマジックショー、林家楽一師匠の紙切り、そして林家三平師匠の落語と盛りだくさん。足立区生まれの落語家、柳家我太楼師匠の司会も歯切れよく、足立区仏教会ならではのエンターテイメント性にあふれた花まつりのひとときでした。





伊興遺跡公園に展示された、古墳時代中頃（5～6世紀）の竪穴式住居。  
住居の中では当時の生活の様子も展示されている。



「椿とモミジのお寺」と呼ばれ春に椿、秋に紅葉が楽しめる薬師寺。

## 三

# 通称の由来や行事が楽しめるお寺

足立区仏教会の寺院の通称や行事をチェックしてお寺めぐりを楽しんでみましょう。

### 【「いにしえ」を歩く】

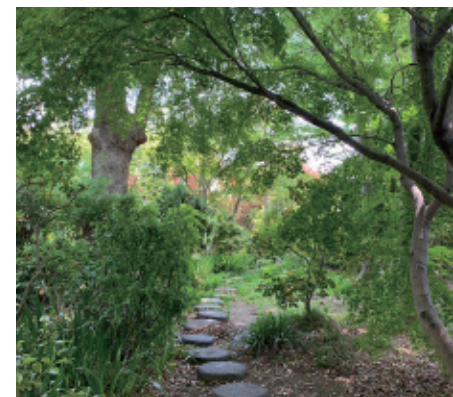
伊興から古墳が発見されていることはすでに書きましたが、竹ノ塚駅から歩いて20分ほどのところにある伊興遺跡公園ではこの辺りで出土した土器や井戸とともにまるで古墳時代の生活を垣間見れるようなレプリカやジオラマが展示されています。弥生時代から古墳時代前期の墓の

形態、方形周溝墓も再現されています。23区の街中でこのような遺跡に足を踏み入れると、足立の歴史のダイナミックさが伝わるようです。

少し歩いたところにある曹洞宗寺院の薬師寺は、「椿とモミジのお寺」と呼ばれ、境内には80種以上のモミジ、100種を超えるツバキが植えられています。春には椿、秋には見事な紅葉が通りゆく人の目を楽しませます。

### 【古くからの信仰や古建築】

足立区には古くからの信仰が感じられ、味わい深い古建築が残るお寺



シーズンオフも清涼感あふれる薬師寺内の庭。





現在は毎年成人の日に行われる「じんがんわ」。(写真提供足立区立郷土博物館)

もいろいろあります。伊興にある時宗寺院の應現寺は、江戸時代にはこの地で念仏道場として信仰を集めました。その山門は、江戸時代初期の山門様式を伝える珍しい木造建築です(足立区有形文化財)。

荒川の北東に位置する皿沼には皿沼不動で知られる永昌院があり、日本最古といわれる地藏菩薩像を拝むことができます。鹿浜の真言宗智山派寺院長楽寺は、本尊の薬師如来が通称「鹿浜薬師」として庶民の信仰を集めたことが記録に残っています。



江戸初期の山門がある古刹應現寺。

す。入谷に所在する源證寺は、天文元年(1532)創建の古刹。聖徳太子を祀る太子堂は、江戸中期の古建築です。

西保木間にある真言宗系寺院の大乗院は、平安時代の創建とも伝えられる古刹。ここでは毎年「じんがんわ」が行われます。

ワラで作った蛇を木にかけて五穀豊穡を祈る、古くから伝承されたお祭りです。この行事にはこんないわれがあります。薬師堂の近くにすんでいた白蛇が堂の焼失とともに姿を消したことで、この辺りが飢饉と悪病で悩まされるように。この白蛇に似た大蛇をワラで作って薬師如来に祈祷したことが始まりだ、と。

昔は大門厨子という集落で行われていた行事で、古くは薬師如来の祭日である1月8日、ある時期からは、農家が仕事を休む七草(1月7日)に行われてきましたが、2009年からは毎年成人の日に行われています。

市街地では珍しい民俗行事で一見の値があります。神事の後には本堂で大根の葉の陰干しを入れた無塩のおかゆがふるまわれます。

## 【文化・芸能に親しめるお寺】

歴史に名を残した人のお墓参りもお寺めぐりの楽しみのひとつ。境内に「東海道五十三次」などの浮世絵版画で知られる安藤広重のお墓があり、その命日にあたる9月6日に「一日だけの広重展」を開催しているのは伊興本町にある東岳寺で



毎年9月6日に行われる「1日だけの広重展」。(写真提供足立区立郷土博物館)





墓域にさまざまな供養塔のある不動院。

千住宿旅籠屋による遊女の供養塔。

戊辰戦争で戦死した芸州藩士の供養塔。

す。安政5年（1858）に没した広重は、当時浅草にあった東岳寺に葬られました。お墓は関東大震災や戦火で破壊され、昭和33年の広重の100回忌に再建。昭和36年に、同寺とともにお墓も足立区に移転し、現在に至っています。

千住は明治維新の際、戊辰戦争に従軍した人々が数多く通過した場所。不動院の墓域には正面に「南無阿弥陀仏」、右側面に「藝州」と大書した供養塔があります。戊辰戦争に千住近在から参加した芸州藩の戦死者が永代供養されています。また、

同寺には、川魚料理人たちが魚類の冥福を祈るために建立した包丁塚の碑があり、千住宿の間屋場に近いことから宿場に関わった人々の墓石が多く見られます。さらに、ここでは明治9年（1876）6月2日に明治天皇東北巡幸のときの御休息所になった中田屋のお墓、千住宿旅籠屋一同が万延元年（1860）に建てた遊女の無縁塔などがあります。

千住が歴史の通過点で担っていた役割、そしてそこに確かにいた人々の思いが風化されることなくここにある、足立区ではそんなお寺と出合うことがあります。

そして深い悲しみを知る場所からは、それを慰めるような深い笑いも生れます。同仏教会の花祭りで清興が大切にされているように、落語などの芸能に縁があるのもこの地らしくかもしれません。

明治を代表する歌舞伎役者、九代目市川団十郎が演じたことで有名になった剣客花川戸助六の墓があることから助六寺と呼ばれる易行院。ここには昭和から平成の落語界を支えた五代目三遊亭円楽の墓所があります。

梅田にある善立寺は、天正19年（1591）に徳川家康の入府にともない開創された、松平家との縁が深いお寺です。同寺は「紙切り正楽」として知られた林家正楽（1896 - 1966）の菩提寺である縁から、毎年春のその命日に当たる4月15日頃と、秋のお彼岸に合わせて落語会「善立寺寄席」を開催しています。

また、2010年にかえる文化研

究所を立ち上げた同寺は、寺院内に100年カエル館東京ギャラリーとして、展示ケース3台のスペースを設置。100年カエル館は年に2回の展示替えを行い、善立寺寄席のときに、毎回カエルのモノによるさまざまなテーマの展示をご覧いただけます。



落語会「善立寺寄席」で紙切りを披露する三代目紙切り正楽。

寺院内には100年カエル館東京ギャラリーを設置。

現代的な寺院建築の善立寺。